第69回青少年読書感想文コンクール結果

三重県審査

優秀賞 1年 前川 瑳紀さん

優良賞 2年 渥美 璃子さん

津支部審査

入選

1年前川 瑳紀さん 2年 渡部 真衣さん 2年 渥美 璃子さん

三重県審査 優秀賞

「素直な心」 1年 前川 瑳紀さん

(『手紙屋 蛍雪篇 私の受験勉強を変えた十通の手紙』 喜多川泰著 ディスカヴァー・トゥエンティワン)

中学生のころ、私には漠然とした憧れがあった。それゆえ、高校受験を私なりにがんばれたのかもしれない。今の高校に入学することが、その憧れへの近道のように感じていたからだ。しかし、いざ高校に入学してみると、私の予想を遥かに超える勉強の量、そして難易度の高さに、私はうちひしがれてしまった。課題を出され、それをこなしていくだけの日々に、私は「別に本気で憧れていたわけじゃないから」と、その憧れを消そうとすることばかり考えていた。しかし、憧れを完全に消しさる勇気も持てず、「がんばらなければならない。でも勉強したくない。どうして私は、やる気が出ないのだろう」と自己嫌悪に陥っていた。

その時、少し興味を持ったのが、この本だった。「手紙屋」蛍雪篇は、高校二年生の和花が、「手紙屋」という人物と十通の手紙のやり取りをすることで、勉強する目的を学び、大学受験を乗り越えていく話だ。和花も私と同じように「大学へは行きたい。でも勉強はしたくない」と思っていた。和花の気持ちや行動は、まるで私のようだと思った。和花が、「手紙屋」と文通を始めるきっかけとなったのは、兄の喜太郎と義理の姉の千春の言葉だった。千春の言葉はとても印象的だった。

「頭で考えて迷っているだけでは、なかなか迷路から抜け出せない。一歩踏み出す勇気を持てば、その一歩から人生は大きく変わる」は、私に向けられているように感じた。そのため、私も和花と一緒に「手紙屋」とやり取りをしているように読み進めていった。

和花の手紙は、まるで私の気持ちを代弁してくれているようだった。和花の手紙を読ん でいて、私も和花と同じように、心の中では、今のままではイヤだ、変わりたいと願って いるのだと気付いた。そのため、「手紙屋」がどんな返事をくれるのかとても期待した。 その手紙で、「手紙屋」から出された問いは、「勉強は一つの道具にすぎない。勉強は何 をするための道具か」というものだった。私は和花と同じように考えていた。将来の選択 肢を広げることができる。私の憧れも手に入る。そして、その他にも、手に入るものはた くさんあるだろうと考えた。「手紙屋」からの答えも、「忍耐力」「自信」「記憶力」 「脳の活性化」「素直な心」など、手に入れられることは、数限りなくあるというものだ った。和花は、それがひとつひとつ心に落ちていった。私は、和花の心がどんどん開かれ ていくのを感じた。しかし、その一方で私は気持ちがどんどん落ちこんでいくような気が した。「勉強の利点なんて知っている」私は、勉強に対するマイナスな無限ループのよう な気持ちから抜け出したい思いで、この本を読んでいたが、どうしてもあまのじゃくのよ うな気持ちが出てきてしまった。和花が「手紙屋」の言葉を納得し、受け入れていく程、 私の心とは離れていくように感じた。和花の心はどんどん勉強したいに変化していった。 「手紙屋」とのやり取りも、勉強を続けるために必要なものに変わっていくにつれ、私だ けが置いていかれたような気持ちになった。

勉強をやり通すために必要なものは意志。しかも、絶対にやると決めたことを、最後までやり通す強い意志。そして、それを毎日、自分に話しかけることだと「手紙屋」は言う。しかし、ここでも私は「そんなことは知っている」と思ってしまった。そんな風に考えてしまうと、その後からの「手紙屋」の言葉も和花の言葉も私の心にはあまり響かなくなってしまった。私はなんとなく読み進め、後には釈然としない思いばかりが残ってしまった。しかし、「結局、変われなかったな。全部、知っているし」と自嘲気味に思った時、ふと千春の言葉が思い出された。「知っている」と思っていたが、私は何を知っているのだろう。勉強の利点も、勉強を続けるのに強い意志がいることも、その他のたくさんの「手紙屋」の言葉も、私が実際にやってみて、得たことではないと気付いた。全て頭で考えたことだ。千春の言う、一歩踏み出すというのは、和花が「手紙屋」に手紙を送るという行動のことだろう。しかし、私が一歩踏み出さなければならないのは、私の固まった心からではないかと気付いた。その一歩を踏み出すきっかけが欲しくて、私は、もう一度この本を読み返してみた。和花のように、すぐに全てが心に染み込んできた訳ではないが、少しずつでも、受け入れていこうと思った。

今、私が変わるために必要なのは素直な心なのだろう。それには、自分が悩んでいることを受け入れ、時には周りの人を頼ったり、アドバイスを聞くことが大切なのだと思った。 私は、まだ勉強に対する考えが完全に変わったわけではないが、一歩を踏み出し、歩んでいきたいと思った。そして、ずっと心の中にある憧れを、もう一度口にすることができるようになりたい。